

# エーゲ海服装の成立とその背景

長谷川 清子

## 1 緒 言

エジプト (Egypt) の文化の盛えていた頃に非常に近代的感覚の服装をした民族のあつたことが、20世紀になつて、考古學者の手によつて実証された。即ち、ハインリヒ・シュリーマン (Heinrich Schliemann) (1822~1890) による、トロヤ (Troja)、ミケーネ (Mykenae)、オルコメノス (Orkkomenos)、ティリンス (Tiryns) の発掘、更には、イギリスのアーサー・エヴァンス (Sir Arthur Evans) (1851~1941) のクレタ (Crete 又は Kreta) 島発掘で、ギリシヤ文化成立前にエーゲ (Aege) 海全体に華麗なエーゲ文明が咲き誇つていたことが確証された。当時の文化は宮廷中心であり、宮殿にのこされた壁画や陶器の繪や、陶製の人形等の遺物を通して、遠い昔の服装をしのぶことが出来るのである。これらは現わされた色彩に於て生き生きとしており、そのシルエット (Silhouette) も非常に近代的な感じを受けるものであることは、余りにも知れ渡つている。しかしながらこの時代の服装が他の諸国との交りがあつたにもかかわらず、極めて独特なものであり、華やかな舞台を演じたにもかかわらず、永い間何れの地の人々にも受継がれることなく忽然と消え失せてしまつた所に史上の興味が湧いて来る。即ちボディにびつたりしたタイトな上衣とフルなスカート等、巧みな裁断によつて効果づけられたエーゲ海の服装は、数千年後の中世期を通じて他の如何なる民族にも現われることがなかつたし、またスカートとボレロ (Bolero) 型の短いボディス (Bodice) の組合せもクレタ、ミケナイ (Mykenai) の特徴であり、この二部式的形体もルネッサンス (Renaissance) に至つて始めてファチンゲール (Farthingale) の出現によつてスカートとボディスの組合せ服となり、恰もその再現らしきシルエットを見る事が出来るのである。このようなことは、我々の歴史的通念に反することであり、それ故に又クレタ、ミケナイの服装も一層大なる驚異と見なされる。

一般に服装史なるものの記述は通史であるため、各時代時代の一應の代表的シルエットを掲げるのみに止まり勝ちであるのは己むを得ない。然しながら我々は自らの経験に於ても一時代の中に於て、或は一地域に於て幾多の變化が生ずることを見逃し得ない。エーゲ文明は少なくとも B.C.3000年から B.C.1200年まで、約2000年に近い歴史を持つものであるとされているから、その服装における進展の道程や発達にも必ずやのこされた軌跡があることであろう。且又、この様な近代的シルエットを生み出したエーゲ海は如何なる環境的特性の下にあつたかについての考察は、我々に「服装形体成立と環境」に関する歴史的立場における新たな問題を提示することとなる。なお図版の選擇に當つては、十分ではないが、努めて珍しいものを用いるようにした。

## 2 地理的條件

地理的に見て、エーゲ海の群島中最も面積が大きいのはクレタ島であり、その位置はギリシヤ (Greece) とアフリカ (Africa) との略々中間で古代東方文明がギリシヤに傳わるための関

門ともいえる。クレタはこうした海洋国としての性格をもち、ミケナイはまたクレタ島に咲いた文化がギリシヤ本土に移植され、成育されるため多くの飛石を有する点に於ても当然のことと思考される。温和華麗な海洋国としての恵まれた地理的条件が、あのクレタ、ミケナイの快活にして流動的な近代的服装を生み出すのに大きな役割を演じたことは見逃し得ないことであろう。エーゲ圏の気候はフィリップソン A. Philippson の指定せる如く、クレタに於て四季の變化は割合に多様であり、1月の気温は7.6—10.8度、7月は26.8—27.3度、年間平均17度台、雨量400—650mmを示している。この様に亜熱帯性の気候は十分な陽光と、水の不足とはげしい気温の變化を伴う。これに比してミケナイはやゝ本土的であり、雨も多く、気温もやゝ規則的である。

### 3 民族及び民族性

クレタ、ミケナイの服装を研究してゆく上に見逃がせない、民族と民族性について考えるならば、クレタ、ミケナイを形作つた民族が同一でない所に兩文明の特色が現われている。考古學的研究の結果、クレタ、ミケナイ文明と呼ばれる兩文明は共にエーゲ海周辺の文化であり、地中海を基盤として咲いた海上文化であることには共通点を持つが、これらの文明を生成させた民族の差違は兩文明の表面的な類似とか影響とかの概念のみでは把握しがたいものがある。所でクレタ文明を創造した民族が、如何なる人種に族するかは今日なお不明であるが、人類學や、地名研究及び比較言語學的研究等によつて、それがギリシヤ及びアジアの印歐系以前の民族で、而も非セミティツク民族と同一系統に屬することが、一般に認められており、クレタ文明は西南アジア民族の一部が、東地中海に進出し、東西南北の交通の要点を占據して、活潑な經濟活動をなし、その豊かな經濟的力の上に先進の東方文化を受容しつつ、而も民族特有の優れた藝術意志を、多彩にして流動的な海洋生活圏の刺戟の下に具現したものに他ならぬのである。それは最早東方文化一般に見られる様な硬直的な内陸文化でなく軽快優美な海洋文化でありながら、エーゲ海を中心とした独自の文化であり、東方の地中海化とも言える様相を呈したものであつて、同時代の他の諸国にはみられない独自の感覺を示した点、注目される。即ち自然主義的で現実的であり、時間的にして、常に軽快にして流動を伴う。このことは温和華麗な亜熱帯的氣候風土と海洋生活という流動的生活から生れ來る洗練された律動的な生活感情と民族の根源的精神から発露したものが對應するものであると考えられる。

一方初期ギリシヤ文明を飾るミケナイ文明は所謂ギリシヤ民族であつてギリシヤ人が始めて大集團をなしてバルカンに移住したのは B. C. 前2000年から1000年期の初期であつて、その主要民族はサロニカ湾岸に定住したイオニヤ人とその西、北、南に定着したアカイヤ (Akhaia) 人及びそれと近似したアイオリア (Aioliói) 人とされている、この事はホメロス (Homerós) の詩、その他の記録から推察されている。アカイヤ人の國は好戰的な進取の精神と旺盛な企業欲とをあわせ持つて海外に強力な發展を行なつた。

ここで兩民族の民族性相違を考察してみるならば、前者は平和的なのに反して、後者は尙武的であり、又美術を通じて感じられることは、クレタが多く自然物特に植物や動物を愛していたのに比べて、いわゆる人間に関心がたかまり、前者は新鮮で自由に生活に満ち流動的であるのに反して、後者は形式化して硬直し、抽象化して文様化することであり、流動的に対して地についた感があることである。

#### 4 エジプトとの関係

クレタに於ける第一隆盛期は紀元前1800年頃であり、エジプトの中王朝にあたり、この頃クノッソス (Knossos) 及びファイトス (Phaistos) がこの島に勢力を張り、エジプト、アジア、その他ギリシャ本土及び諸島、嶼との交通が行われた。このため、先進の諸外国の文物が輸入されて、その影響を被つたが、クレタ人はそれに征服される様なことなく、藝術の根本精神、基本の形体は少しも變改を受けなかつたのみか、かえつてこれを消化し、自己のものとしてこれを陶冶洗練していつた。一例をあげるならば、壁画に用いられた顔料を見るに極く初めは黄、赤 (共に Burnt ochre clay より製せられる) 等であつたが、間もなく緑及び青が之に加わつた。この二つの顔料はエジプトから傳つたことは疑いないと言われている。然しエジプトに無い顔料が一つあつた。それはグレイ (Gray) であり、なお漸次この平面混合によつて褐色 (Brown) 暗褐色等の顔料を用う様になつた。このことはクレタ人が他の諸国の文物を鵜呑みにすることなく自国のものとして完全に消化した一例といえる。特にクレタ人がグレイを発見しその使い方を知つていたということは非常に興味深いことである。なお壁画から想像するに当時クレタ人の服を作るに用いた材料は、かなりエジプトから移入されたもので、形体もクレタ、エジプト共にチュニック (Tunic) ロイン・クロース (Loin cloth) を用いた点兩者の交流度を明瞭ならしめる。

#### 5 時代の推移

エーゲ海世界におけるクレタ文明の指導的地位は、クレタの第一隆盛期、E. M. III (Third Early Minoan Reriod) より M. M. II (Second Middle Minoan Period) に確立したが、当時のクレタ島には二、三の勢力、即ち、クノッソスをはじめとしてファイトス (Phaistos)、マリア (Mallia) の宮殿の王が分立していた。ところがこれらの諸宮殿はその他の別邸とともに、M. M. IIの末及び第三期末の二回にわたつて破壊され焼失している。その原因としては諸説があるが、いずれも地震説が妥当と思われる。何故ならばこのカタストローフの後直ちに諸宮殿などは等しく復興したばかりか、その規模と壯麗さにおいて、一段の飛躍をしめし、しかもそこには他の文物と同じように異国的な要素の出現が認めがたいからである。この時期、M. M. III (B.C.1800—1600) からクレタの第二隆盛期が始まつて、L. M. II (Second Late Minoan Period B.C.1400) の末まで続くこの時代はクレタの最盛期であり、その政治力と経済とにおいては東部地中海世界の女王であり、その文化においてはオリエント (Orient) の諸文化に決して劣らないほどに高いものであつた。

これらの美術は前にも述べた様に第1隆盛時代の直線的な発展の上にあるが、なお様式上の變遷は認めなければならない。簡単にいえば建築は別として初期には一般に自然主義的傾向が著るしく、ここに活氣に満ちた絢爛たる美術の華が開く。しかし L. M. II (B.C.1500乃至1450~1400) となると漸く創造力が衰えて形式化が認められるのであり、それからミケナイ時代への転移を示す。

クレタ文明が栄えている時、ギリシャ本土の海岸地方にはクレタ人がいたが、必ずしもクレタの直接の支配圏ではなく、本土の大部分には異民族がいて低級なヘラディック (Helladic) 文明があつた。しかるに B.C. 14世紀 (あるいは16世紀) 頃から急激にクレタ文明が侵入し拡がつてきた。この時期は M. M. III 即ち中期ヘラディック第三期が始まる。そしてミケナイ文明

とはギリシャ本上におけるクレタ文明であつて、ここに初期ミケナイ時代が始まる。ミケナイ時代は初、中、後の三期、あるいは初期、後期の二期に分けるが、いずれにしてもB.C.1400年頃は劃期的な年代であるから通常は二期に分られる。初期ミケナイ時代にはアルゴリス (Argolis) 地方とボテア (Boiotia) 地方を中心として、其の他のペロポネソス半島やアッティカ辺りに地方勢力が成長していた。ミケナイ、テリンス (Tiryns) ピュロス (Pylos) ヴァフェイオ (Vaphio) オルコメノス (Orkomenos) テバイ (Thebai) などがそれらであつてこれまでに堅固で立派な城塞が築かれ豊富な埋葬品をもつた墳墓が造られた。この諸勢力は北方から来たギリシャ人が主力であつたから城塞や住居は獨自なものであつたが、その他文化一般にはクレタ的要素が圧倒的に強くなつてゐる。クレタとの直接交渉によつて勢力が成長し、文明が急速に進歩したのである。しかるに B.C. 1400年頃にエーゲ世界の情勢は一變した。ここにクレタではなく L. M. III、本土では後期ヘラディック第三期また後期ミケナイ時代となる。次第に強大になつてきたギリシャ本土の民族が遂にクレタに侵入してそれを倒してしまつたからである。クレタの宮殿も都市も潰滅して異つた建築があらわれ、異つた人種がこの島を支配した。ここでエーゲ文明の中心はギリシャ本土に移り後期ミケナイ時代となる。この後期ミケナイはこの様にクレタ文明の後継者とはなつたが、しかし文明の程度は一般に低下し美術は粗雑な拙劣な模倣と形式化に終つた。唯幾分その中に、ギリシャ的性格がうかがわれる点ミケナイ美術の積極的な意義を理解することが出来る。

## 6 美術上の特色

服装研究に際して、この時代の如く文献的資料の少ない場合には、美術に現われた特色を把握することは重要な意義を持つ。壁画等の遺物に見られるクレタ美術の特色は、先ず自然主義的であり、その対象のとらえ方、表現法においては可憐な親しみのあるものであり、総べての面において、小さくして華麗な面のみを感じとらえたのであつた。このことはただ表面的、或は視覚的にのみ物を把え理解したからであらう。感覺に映じたまま、興味のままに無心に自然を把えるのが、クレタ人の自然主義である。そして而かもクレタ人は親しみのある自然のうちに自己を空しくして欣喜して没入する。このような自然に対する純眞さは数千年にわたつて常にクレタ美術を形式化や因襲化から防ぐことが出来た。それだけでなく、表現される人間、動植物、つぼの形態、下細の柱の何處にも安定とか静止とかがない。総べてのものを動的に把え表わす。そしてこの運動が特定のものとなつてゐる。人も動植物も総べての部分において運動しているのである。運動のための運動、全体における運動といつてもよい。またこの運動は激しいばかりでなく柔軟でしかも終りがない。だから軟体動物的な運動といえる。従つてそこには、正しいリズム (Rhythm) ではなく無限の流動がある。以上の様に表面的にのみ対象を理解し、その流動面に引かれるとき、その美術は自ら二次元的となるがクレタ民族をして古代の繪画民族として成功させたものは色彩への愛着であつた。ここでクレタ美術を性格づけるならば、それはオリエンタ的なもののエーゲ世界化といつてもよいであらう。

一方クレタ美術が海を渡つて異つた民族によつて育成されたミケナイ美術には、その中にクレタと相反するギリシャ的性格を持つ。クレタ美術に對してミケナイ美術の非自然主義は抽象化と動性が欠けていることに由來してゐる。戦士や宮女また馬などはあるいは直立し、腕をあげていても、上体は動いていないし、図案化したつぼ繪のたこにしても均衡を保つてゐる。ミケナイに至つて初めて人間は確乎と兩足をもつて地上に立つてゐるといわれているのである。

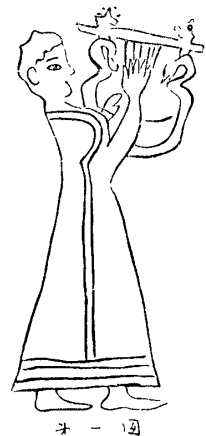
クレタの流動的なのに對してミケナイ美術家が求めるのは安定であつた。先にも述べた様に壁画の宮女や戦士などの表現は角ばつている。クレタの滑らかな曲線美に對して、硬い直線的な線によつて生硬むしろ剛直な表現である。また黄金仮面や獅子の角状様のように對象を平面から組立てている。図案は構成されるものであり、ミケナイの図案的單位は安定あるものであると同時に、對象の本質をよくとらえ端的に直裁に簡易化している。本質を構成的にとらえたところにクレタとは異つた生命力が強く表われるのである。もつともこの激しい生命力は、新興民族のそれでもあるが、それが簡明に組立てられた表現物からは一層生々しい。ミケナイ建築の代表であるメガロン (Megaron) は、この安定と構成とからくる力を最もよくあらわしている。しかしミケナイ美術はなお厚く、クレタ美術の外衣によつておおわれている。またその技巧も表現法も對象もクレタの模倣である。しかし美術的には低い、しかしなおその内にはクレタと異質な本性が頑固に存在している。そして時にその本性が技巧を克服してすぐれた作品をも作り出しているのである。そして以上にあげた様な抽象化、安定構成、本質の直接把握といつたものはギリシャ美術の本質につながるものである。1200年頃から始まつた、西北種族の南下運動、すなわちドリス人の侵入によつてミケナイ国家と文化が潰滅したとき、ミケナイ文化のクレタの借衣も去られやがて純粹なしかし素朴なギリシャ美として幾何學様式の美術が萌え生ずるのである。

## 7 服装上の時代的變化

概觀的に言つてクレタの服装は非常に近代的で輕快で新鮮で20世紀の我々に古さを感じさせないばかりか、この時代の裝飾品はパリ (Paris) の平和街のインスピレーション (Inspiration) として今日までも永く留つている。こうした服装も時代的には漸進的な變遷を経て來ている。

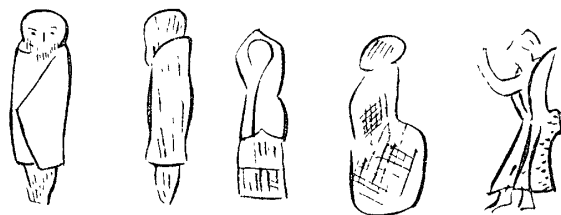
先ず男子の服装についてみるに、初期の頃はロインクロス (Loin Cloth) をつけており、快活な色と模様のあるもの、又は無地のものもあつた様であるが、それが進歩してロイン・クロスより一步前進した三角の形をした袴をはいた。丁度猿股パンツの筒を短くして大腿を充分に見せるようにした形であり、その裁断は裳を腰に巻いた時、股の所の中央を前後縦に切つて、前と後と縫合せ筒とすればよいのであつて、ロイン・クロスより一步前進したものといえる。又上衣には短いチュニク (Tunic) が着られた。M. M. III の B. C. 1700~1600年代と想像される壁画には、衿、袖口、裾の外脇縫、肩通しにも太く縁取りがしてあり、これがクレタ衣服の特徴となり、後にはギリシャ、ローマ (Rome) にも受け継がれる。特に注意すべきことは、このチュニクの形が身体にびつたり合つてタイトになつていふことで裁断を工夫して立体化したことは一大進歩といわねばならない。又時には男子が足首までの長いチュニクを着たこともあつた。第一図に示すのはクノッソスから発見された立琴をひく男子であるが、時代的には、クレタ末期 L. M. II—III のものと想像される。なお当時の人々は美しい足飾に凝つたことは屢々壁画で見られる。例えば短靴、半長靴などに刺繡の飾りをつけた如き第二図に示すのは、サンダル (Sandal) の一例である。

次に婦人の服装についてみるに一般に男子のそれよりも華麗である。第三図はクノッソスから発掘された、クレタ初期の婦人の外套を示した図であるが、後にのべるあのウエスト (Waist) を細くしぼり、ボディに合せた近代的な服装へと發展するものの原型となつたアルカイック (Arckaique) な





図二



図三

服装と考えられる。この頃すでにコルセット (Corset) が使用されており服のファンデーション (Foundation) に細心の注意がはらわれていたことは驚くべきことで、現在トロント美術館にある女神像 (象牙に金の透し彫) によつて想像出来るのである。又クノソスの壁画に表われた宮女たちの服装を見ると非常な凝り方を示し、裾飾りをつけたスカートの上のチュニック、刺繍した袖つきのボレロ不規則な裾飾りと広いスカートの上のチュニック、その外、線の扱いを非常にオリヂナル (Original) にしたもの等16世紀にフランス (France) その他で流行したスカートを思い出させるものがある。スカートとボレロ、スカートとチュニックの組合せは明らかにツ

ウ・ピース (Two piece) である。見逃がせないものの一つとしては、タイトな袖がいずれも半袖で終っていることで、スカートを四五枚も重ねて上程短く仕立て裾に行く程容積も広くとり、横に数段の線が出来ているスカートと極めて巧みな調和を見せている。その上に弧型のエプロン (Apron) で体を掩つた短い腰衣があり、太いくけ紐で腰を二巻きにし、前で丸結びにしたもの、帯は当時としては全く独特なものである。輪で彼女らのスカートを拵げているのはクリノリン (Crinoline) の祖先ともなつている。第四図に示すのは、クノソスの壁画に表われた宮女たちの服装であるが、クレタの婦人の代表的なものの一つである。特に興味深いのは前



図四

割のボレロに両乳が露出されていることで、現代人にとつては実に破天荒なことといわねばならない。第五図は胸のカット (Cut) の色々を示した図でやはりクノソスの壁画に

現われたものである。頭髮は肩の辺まで垂らし、幾分ちぢらせていた。帽子は圓錐状のヘルメット (Helmet) 帽子とか平たい帽子等が被られ、胸元は宝石によつて飾られた。

さて、色彩はと言うと非常に生き生きとしており、平和と題するゴーギャン (Gauguin) の作品に見られるよりも、数千年の昔であるにもかかわらず、生き生きとしていた。そうして色の使い方は恰も、近代繪画のそれを思わせ、調和とか秩序に細心の注意が拂われていた。壁画の色から想像すると、赤、白、黄、黒、青、緑などの色彩が自由に使われており、これらの色



第五図

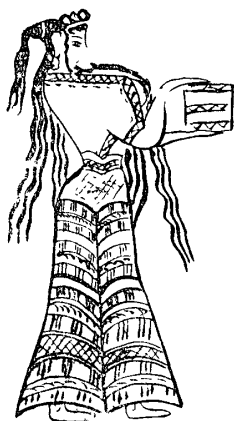
を用いて可憐な華かな愉悅に溢れる牧歌的なもので、繊細な神経と洗練された趣味性とが、行渡つていた。又当時の婦人の服装が華やかであつたと考えられることの一つに、クレタ島の宮殿は非常に解

放的で城を守るための城壁等は作られていない所から島の周邊を海軍で守り、宮廷はこれらの婦人を中心とした社交がくり広げられたのではないかと考えられ、壁画に宮女の姿の多く見られることから想像される。

それでは当時の人々はどんな材料を使つて着物を作つていたであろうか。先ず、毛皮を使つていたことが想像される。クノソス出土「携帯用床几の壁画」杯をかわす若者（ヘラクリオン美術館）の右の人物が肩から後にかけているショール（Shawl）風のは毛皮だと考えられる。又婦人のスカートも毛皮を以て造つたので形が不規則になつている点など外観的に興味あることである。なお同時代に盛えたエジプトとの交通が史的に明らかにされている所から考えてみるに、麻、その他の植物性の繊維が使われたことは当然で、あの流暢な線を壁画に残している。クレタ人が着物の材料においても、かなり研究をしていたことが想像されるのである。なお、当時ギリシャの誕生前にクノソスにおいて既に評判の仕立職人をもつていたということは、注目すべきことである。

（注 La Couleur dans L'Histoire du Costume L'Antiquité Civilisations Méditerranéennes 参照）

次にクレタ文明が海を渡つてギリシャ本土に移されてからの500余年間をミケナイ文明時代と呼ぶ。大きくみてこの時代はクレタの外衣によつて覆われており、美術品がそうであつた様に服装も形式化され、文様化されて安定が見出される。第六図はテリンス（Tiryns）の宮女であるがクノソスの宮女に比較して硬直した感が強い。その他ミケナイ、テバイ（Thebai）オルコメノス（Orkkomenos）各址から壁画の断片が発見された。それらはクレタ壁画の末期的な



第六図

ものであるがその中に表われた服装はクレタの濼刺としてモダン（Modern）な感性の女性に對して、生硬な威風のある宮女として描かれている。ボディにびつたりしたボレロとスカートの組合せ、スカートに幾段もの切替がつけられていること、袖が半袖でいずれもタイトになつていること、前身頃がカットされて乳房が見えていること等、大方クレタの踏襲で服の大きな意味での變化は見受けられない。けれども細い点では多少の變化が見出される。例えばスカートの切替線がクレタ時代に比べて一層整理されたことや、その縞の扱い方も何か形式的で文様化されており、服装全体から受ける感じが何か安定や威厳が感じられる。勿論これは繪としての表現の様式にもよるが………又クレタ時代に比べて婦人の髪は一層長くなり、額の辺りからリンク（ring）されて美しくウエ

イブ (Wave) 髪を長く垂らしたことは発掘された土偶にも見られる。筒袖の両手を拡げ伸したような姿勢で、半身は袴をはいた様に広がるスカートをつけ胸部には小さな乳房をつけているが、やせていて全体が非常に図案化されている。服に扱われた色彩もクレタ時代に比べて、やはり新鮮さが失われ、形式化され、クレタの模倣といった感が強い。

## 8 結 言

最後に史上におけるクレタの服装の位置を再考し結びとしたい。古代社会の服装を分けて、一つは裁断の技巧によつて身体にびつたり適合させた服装と、他の一つは、ドレープによる陰影の美しさや動きの美しさを企図した服装にに分けられるが、前者はクレタの服装であり、後者はローマ、ギリシヤ、エジプト、アツシリヤ (Assyria) 等の服装ということが出来る。しかしいずれも今日の我々の概念では、古代服の域を出ていないという所に、共通点が見出される。この様に古代社会の国々が文化の交流をはかりながらも互に各国の独自の発展をさせた所に民族の誇りが感じられ、エーゲの服装はギリシヤ、ローマの服装へと直接的に展開を示さなかつたけれども歐洲服装の発達のため的一大原動力となつたことは最早疑う余地がない。従つて、クレタの服装は服装史上見逃すことの出来ない重要な位置を占めるものと言わねばならない。なお本研究については最初から御指導いただきましたお茶水女子大學の石山彰先生に深く感謝の意を表する次第であります。

## 参 考 文 献

- |  |                 |
|--|-----------------|
| The Palace of Minos at Knossos   | by Arther Evans |
| La Couleur dans L'histoire du Costume L'antiquité Civilisations Mediterranéennes |                 |
| 女性服装史  | 今和次郎 著          |
| 地中海世界史   | 井上智勇 著          |
| 世界美術全集 5 ギリシヤ  |                 |
| 世界服装史要   | 江馬 務 著          |
| 服装史のスタイルブック  | 石山 彰 著          |
| 西洋美術史論攻  | 沢木四方吉 著         |
| 西洋服飾史要   | 青木良吉 著          |
| エーゲ文明の研究   | 村田数之亮 著         |
| エーゲ文明史   | 浜田・村田 著         |
| 西洋建築史  | 足立 一郎 著         |